
レイニーソング

梶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイニーソング

【Nコード】

N6825Y

【作者名】

梶

【あらすじ】

高校生歌手・雨宮小夏として名をはせる少女、瀬尾小夏。はりのあるその歌声で音楽界をリードしていた——のも、もう過去の話。彗星のごとく現れた新人歌手・S H E E N A^{シーナ}により、ランキング上位の座を奪われてしまう。それからにはなにをしても失敗続きの小夏は、どこへもやりようのない思いを胸中に抱えていた。しかもそのS H E E N A、素顔も性別も年齢も非公開の覆面歌手で……。

覆面歌手の名は

あの空を、貫くすべならここにある。

声という名の矢を放ち、空へ。手を伸ばしても届かない、はるか高みへ声を響かせる。雨のように降り注ぐ音たちをつかんで、息を大きく吸いこみ、翼を広げ、さあ——歌を、

（——あ）

思った瞬間の失速。そして、失墜。心に空いたすきまに、ひとつのピースをとり落とす。

その瞬間にきらめく世界は色を失い、薄灰色にあせていく。こぼれていく音の雨。すぐに取り戻せ、と必死に声を張り上げても、落ちていったものは拾い上げられることをかたくなに拒む。音圧が失われ、現実が近づいてくる。真っ暗に沈みゆく視界と、感情の消えていく音楽が小夏を襲う。

（いや……お願い、待って）

懇願しても、けっして戻らない。

伴奏の余韻がぷつりと途絶える。

ヘッドフォンからなにも聞こえなくなったのを確認してから、重い息をついた。

曲が終われば自然と周りに満ちる、完全な無音が耳に痛い。自分を責め立てるようなそれから逃れるようにスタジオの外をふり向くと、窓の向こうのふたりはそろって首をふる。

——予想していた答えではあった。

歌うさなかに浮かび上がった違和感は、最後の最後まで消えずにくすぶりつづけた。歌った本人さえ満足できないような歌が、他人に受け入れられるはずがない。

最近はいつもこうだ。歌っても歌っても、はしから違和感がわいてくる。リテイクをくり返すほど声は疲れ、それでも違和感は大き

くなるばかりで、いつかは歌がきらいになってしまいそうで怖くなる。

「すみません、今日はもう」

申しわけなさでいっぱいになりながらマイクに伝えて、うつむいた。マネージャーの野宮が表情をゆるめてうなずいたので、怒られることはないみたいだとほっとする。

スタジオの扉を開けると、とたんに雑音が耳にはいりこんでくる。歌手になるまでは気付くことのなかったわずかな環境音だ。野宮とエンジニアの会話も、そのときになってじかに伝わってくるようになる。

「もう六時をまわったし。終わりにしましょうか」

「今までのデータはどうします？ 一応残っていますが」

野宮の目が一度、小夏に向けられた。視線がからみ、小さな間のあとに彼女は首を振った。

「本人も納得がいつていないようなので、消しておいてください」

「わかりましたー」

間延びした声が了承する。わたしはなにも言っていないのに、と恨めしげに小夏はパソコンの画面を見やった。そんな彼女の心中に気付くふうもなく、画面の中の歌唱データはまたたく間に消去されていった。エンジニアは回転式の椅子をくりと反転させて問う。

「次はいつにします？ 学校もまだあるのかな。今までどおり一週間後の土曜ですかね？」

「そこにはまた別のレコーディングがあるので……それが終わるまでは、この曲は延期ですね」

今日で終わらせるはずだったのに。言外に苛まれているような気がしてくる。

しかしそのニュアンスに傷心するより先に、小夏の頭には疑問符が浮かんだ。

（いまのって）

ぱっと野宮の顔を見上げる。――別のレコーディングがあるだ

んで、そんな話は一言も聞いていない。

「野宮さん、今の、どういう」

「あら、言ってなかったかしら？ 同じ事務所の相手からコラボ楽曲の申し入れが来ててね、それを受けたの」

「だれと」

「誰だと思う？」

「野宮さん！」

「SHEENAさんよ、あの」

し……っ、とすつとんきょうな声をあげてしまつて、口元をおさえる。

“あの”。そんな一言が添えられるほどに、今となつては有名な名前だった。音楽界に現れた彗星、低迷しかけたこの世界に差した光芒。雑誌や新聞を見れば称賛の嵐で、今世紀最高の歌手だと噂されることもしばしば。

そしてその名は、小夏がいちばん聞きたくないものでもあった。

——しいな、シーナ、SHEENA。半年前のシングルCDランキングで、自分の上にその名前を見つけてしまったそのときから不調続きだ。なにを歌つてもいまいち納得がいかない、売り出した楽曲はどれもこれもSHEENAのそれにはかなわない。

世代の女子高校生歌手、兩宮小夏の名は、いつのまにか人々の頭から消え去っていた。

そんな相手からコラボレーションの申し入れだ。自分の意思が通るのなら四の五の言わずに却下しているところだけれど、あいにく立場が弱いのはこちらのほう。なにか言おうものなら子どもの文句だと取られてたしなめられるのが関の山だ。それがわかっているくせに、ただで認められるほど大人にはなれなかった。

「それじゃあ、SHEENAの顔は」

「SHEENA、さん」

「……SHEENAさんの、顔は見られるんですか？」

小夏の言葉を受けて、エンジニアが手を叩いた。

「そりゃあいい！ レコーディングの際にはぜひうちのスタジオを。覆面歌手のご尊顔がおがめるのであれば、料金の方も安く……」
「いいえ、S H E E N Aさんのレコーディングスタジオはもう決まっているそうなので。小夏ちゃんとは別の日に録るから、お会いすることはないわ」

小夏とエンジニアがふたりで肩を落とす。

S H E E N Aの人気を手伝っているのが、いつそ厳格なまでの機密性だ。顔はおろか、性別も年齢も秘密とされている。歌声には男声と女声の両方を使い分け、さらに楽曲のそれぞれが異なった声色を持つ。もちろん顔だしのテレビ出演はすべて断り、ラジオなど肉声が入るメディアにすらも現れない。

いつかS H E E N Aは二人組ユニットなのではないかと噂されたこともあったが、事務所側は断じてひとりだと主張を続けた——その確証はどこにもないにも関わらず。七色の声を持つ覆面歌手として売り出されたS H E E N Aは、確かな歌唱力も相まって老若男女を問わず急速に支持されていった。

その波の広がりには、小夏の機嫌を損なうには十分すぎるほどで。

「それじゃあ、ご挨拶にうかがうぐらいは」

「小夏ちゃん」

「だめ、ですか」

深くうなずかれ、小夏は口をへんの字に曲げる。——気に入らない。クラブの相手にも顔を見せないなんて。

「初めての共同制作の相手に選ばれたらしいから、ね？」

野宮の声に、かすかに苛立ちが混じった。聞きわけがないと思われるに違いない。ぶんむくれた顔で分かりましたとだけ答えて、そっぽを向いた。険悪になりかけた空気を感じ、エンジニアが頬をかく。

「今日はおしまいですかね？」

「ええ、ありがとうございます」

彼がさっさと道具を片付けて立ちあがると、多大な負荷がかけら

れていたことを示すように椅子がきしんだ音をたてた。

ひとこと、ふたこと、マネージャーとエンジニアの間に言葉が交わされる。それらは小夏の耳にはまったく入ってこない。どうにもいたたまれなくなった。

「……おつかれさまでした！」

通学用の鞆を手につけて、頭を下げあう二人の間をすり抜けた。弾かれたように部屋を出る。小夏ちゃん、と名前を呼ぶ声も聞かぬふりをして、走る一歩手前の早足で廊下を抜けていく。ごめんなさい、ごめんなさい、次はもっと上手に歌うから。そう心の中で叫びながら。

途中途中でかかるねぎらいの声にも答えずにいると、ますます自分がみじめになっていくようで胸がつまった。自分の足元の影だけをにらみつける。勇み足で歩きたびに硬い足音がスタジオに響いて、職員たちがなにごとかと小夏をふり返った。

——なんて、弱い。

歌が大好きで、ずっと歌っていたくて、その願いを叶えるために歌手になったというのに。人気なんか出なくてもかまわない、自分の歌を聞いてくれる人たちに届けばいい。そう思っていたはずが、今ではその歌でさえ嫌いになりかけている。

歌が好きなのか、それとも歌手という立場が好きなのか。即答できる自分でいられなくなっていた。

泣きたいやら情けないやら。プロなのだから、これぐらいのことでいちいち心を乱されてはいけないというのに。

（腹が立つ、ったら！）

いらだち紛れに思いきり建物の扉を開くと、がっんと振動が伝わってきた。なにかにぶつけてしまったのか。ときどきしながら扉の向こうをのぞいた小夏の顔から、さつと血の気が引いた。

相手は人だ。それも男の子。

自分と同じか少し下ぐらいの年にみえるが、制服を着ていないため学生なのかすらわからない。運動など知らないような白い肌に、

男子にしては細い骨格。無言で頭を押さえてしゃがんでいるのは、扉から入ろうとしたまさにその瞬間に、小夏がそれを押しひらいてしまったからかもしれない。

「ごめんなさい、……だいじょうぶ？」

あわてて小さな隙間から外へ出て、彼の隣にかがみこんだ。う、とうめいた声は、外見にたがわず中性的でやわらかい響きを持っている。すこしだけ鼻声ではあるものの、そこに不快感はなかった。

「だい、じょうぶ……です、すいませ、」

そんな声が、口の中でくぐもる。むしろそれは小夏の心配をあおった。大きなたんこぶができているかもしれない、手当ては必要だろうか。

小夏の心配をよそに彼はぱちぱちと数回まばたきを繰り返して、やっと彼女を見あげる。身長は低いみたい、と、おぼろにそう思っている目があった。彼はけげんそうに眉を寄せたりのばしたりしたあとに、はっと息をのんだ。

「あまみや、こなつ」

そう呼び捨てにされたことを、喜んでもいいものだろうか。

マネージャーの弟くん

瀬尾小夏。それが小夏の本名だ。芸名である“雨宮小夏”も名前の字面はまったく変えていないだけに、見ず知らずの相手に面と向かって呼び捨てにされると言葉につまってしまふ。最近ではマネージャーと会話をすることが多いので“ちゃん”付けに慣れてしまっていたけれど、久しぶりに呼ばれた歌手としての名前には背筋が伸びた。

「ごめんなさい」

言うことに困って、とりあえずもう一度だけ謝っておく。すると相手は小刻みに首を振った。

「こつち、こそ。すいません、邪魔なところに立ってて」

「悪いのはわたし」

怒ったつもりはないのだけれど、彼はしゅんと肩を落としてしまふ。声がかきつくなくなってしまっただろうか。くせのようなもので、なかなか抜けないので困っている。

優しく、優しく。自分に言いきかせて胸をおさえた。立ちあがると、彼も一呼吸おくれて腰をあげる。

「ええと、……スタジオに用があるの？」

歌手としてデビューを果たしていないような一般人でも、代金さえ払えばスタジオハウスを使うのは自由だ。ギターやドラムなどの楽器を貸し出しているところが多く、追加料金でミキシング——音量や音質を調節して組み合わせる作業を頼むこともできる。

とはいっても、たった今小夏が使っていたのはぴんからきりまであるスタジオの中でも高額で、質の高い録音を目指すためのものだ。その料金も、いち学生がぼんと払えるような金額ではない。

だからこそ尋ねただけけれど、彼はきょんとしたあとに、いや、と否定する。

「いま、スタジオに姉ちゃ……姉がいて。知ってる——ますか」

「敬語じゃなくていいから。続けて」

すると彼は視線をさまよわせ、やがて小夏のそれとぶつかるためらいがちに喋りだした。

「姉ちゃん、歌手のマネージャーで。S H E E N A って知ってるかな」

嘘をつかないで、と即答することだけはかろうじて踏みとどまった。その代わりに露骨に顔をしかめてしまつて、これでは突っぱねるのとどちらがよかったのか分からない。彼は小夏のその表情にいささか驚いた様子をみせたものの、自分の言葉を取りつくるうことはしなかった。そろそろと彼女をうかがう。

「色々なところをまわつて、次の曲のスタジオを決めているらしくて……あ、そうだ。小夏さん」

小夏と目を合わせ、ほほえむ。

「コラボを受けてくれて嬉しい。ってS H E E N A が言つてたつて……言つてた、みたい」

声はほとんど尻すぼみになっていったうえ、言い方は遠回しにもほどがある。しかしその言葉の中身に、小夏は目をまるくした。それを受けることになった本人でさえ、今日になつてはじめて聞かされた話だというのに。

一般人ではまず耳にできるような情報ではないはずだ。それこそ、S H E E N A か小夏の関係者でもなければ。

「ほ、ほんとうに？」

「嘘じゃない。嬉しいって」

こういうときだけはまっすぐに人の目を見るらしい。

「そっちじゃなくて、お姉さんのこと。S H E E N A のマネージャーって本当なの」

そう問いかけると、やっぱり信じられないか、と彼はななめ下を向いた。

小夏はしばらく彼をながめたすえ、ひっそりとため息をついた。どうしても嘘をついているようには思えない。それでも業界人なの

だから、初対面の相手をよく観察する目は持っていると自負している。

信じてみようかという気持ちが働いた。わざわざ小夏を騙すためにだけにここまで来たとは考えにくいし。

（それに、もし本当なら）

これはチャンスだ。

本人と直接会うには至らなくとも、自分の言葉だけでも伝えられればそれでいい。——うまくいけば、その正体をつかむことも夢ではないだろうし。

嘘だったとしても、だまされたと悔しがるだけでいいのなら。小夏はうなずいて、彼の言葉を待たずに口をひらいた。

「S H E E N Aに会うことはあるの？」

もちろん彼自身には期待はしていない。要するに、彼からS H E E N Aのマネージャーに、さらに本人へと伝わればじゅうぶんなのだ。そう考えていたけれど、予想に反して彼は遠慮がちにうなずいた。

「あ、でも、会わせることはできないから……」

「いいわ、そんなの！」

小夏の声に興奮が混じる。

これでS H E E N Aへとつながるパイプができた。百パーセント信じているとはいえないまでも、かけてみる価値はある。

小夏は早まる鼓動をおさえるように、ひとつ呼吸を置いた。

「S H E E N Aに言いたいことがあるから、それを伝えて欲しいの」

「……内容にもよるけど、おれでよければ」

長いのもちよつと、と目をそらした彼に、小夏は唇の端をつり上げて挑戦的に笑った。彼の向こうにいる、形の定まらないS H E E N Aの影を見すえて。

「ひとつだけよ。——“あんたには絶対に負けない”って」

彼は目に見えてうるたえる。

「え……S H E E N Aが、なにかしたの？」

「特になにも。ただ気に入らないの、悔しいのよ」

なにもかも奪っていつて、平然とあの位置に立っているその歌手がうらめしい。そこはわたしのものだったと叫ぶことなどかなわず、せめてどんな奴なのかと顔を見ることさえも許されないでいる。…なにが覆面歌手だ、なにが七色の声だ。なんでもかんでも秘密にしておいて、誓ってひとりだから信じてくれとは虫がいいにもほどがある。

もちろんそれをぐちぐちと吐き捨てるのは自分のプライドに反していた。小夏は肩をすくめる。

「それにわたしが不調だから。自分にはっぱかけたいの」

「不調？」

「歌っても満足できないっていうか、ね……そういうときがあるの、歌手って」

わたしはこれがはじめてだけど。胸の奥でそうつけ足した。

「あんたが気にすることじゃないわ、ええと……弟くん」

呼びかたに迷ったすえにそう呼ぶと、案の定彼は眉間にしわをよせる。

「和樹って、名前が」

「はいはい。覚えとくわ、弟くん」

「……聞いてないし」

いいところに収まってしまったのだから仕方がない。初対面の相手を名前で呼ぶのは腰が引けるというのも事実だ。

和樹がむすつとしていた前で、鞆に取りつけている時計で時間を確認した。夏が近づいているために、今日の日の長さはあてにならない。七時半までに家に帰れないのであれば連絡を入れるときつく言われているが、これから急げば間に合いそうだ。彼の横を通り抜けてふり返る。

「じゃあわたしはこれで。伝言よろしくね。あとは頭、ごめんなさい」

「あつ、返事はいつ伝えれば」

返事が返ってくるのが当たり前だと言わんばかりのせりふに、思わず吹きだしてしまう。和樹はなにを笑われたのかわからないようだけれど、それを説明するつもりは毛頭なかった。

一方的な伝言に、わざわざ返事を返すような律儀な人間。S H E E N Aはどうやら、そんな相手らしい。

さて次に会うのは、と考えて千夏はそらを見た。うすい水色の空に、紫のグラデーションがかかっている。この水色が完全な藍色に染まるまでには、まだ時間がかかりそうだ。

（事務所に呼ぶわけにもいかないし）

S H E E N Aのマネージャーの弟であれば事務所の場所ぐらい知っているだろうが、直接的な関係があるわけではない小夏が彼と待ち合わせをするのではよからぬ噂がたつおそれがある。そもそも事務所は歌手、ひいては業界人の仕事の場なのだから個人的な要件は持ちこみたくない。野宮に関係を疑われるのも癪だ。

「来週の金曜日、六時。またここでどう？ 学校の帰りに寄るから」
通っている私立の高校は近くにある。部活には入っていないため、長く待たせることはないだろう。和樹がはつきりとうなずくのを確認して、小夏は今度こそ彼に背を向けた。

日が沈みはじめ、足元の影は遠くまで伸びている。まるでマイクのようにだと頭のすみで考えて、苦笑した。どうしても歌からは離れられないみたいだ。嫌いになりかけても、歌がこちらを向いてくれなくても、結局は同じところに戻ってきてしまう。

（戻れるのかな）

歌手になったときのようにな、歌うことを心から楽しめた日々に。不安に負けてしまいそうになって首を振った。

「だいじょうぶ」

そうつぶやいて暗示をかける。まだ歌える。好きでいられるかぎり、嫌いにならないかぎり。

わたしはまだ、雨宮小夏でいたい。

風は熱気をはらんで

高校生歌手という肩書きは、嘘いつわりではない。

はじめて歌手を志したのが三年前、小夏が中学三年生に上がったころのことだ。もちろん厳しい両親には猛反発をくらい、もうすぐ受験なのだからと諭された。

もちろん、小夏はそこで諦めることなど選ばなかった。ふたりを納得させるためにと必死で考え、都内でも名のある私立高校に合格することを条件にオーディションに出場することを申し出た。そのころの小夏の学力は中の下がいいところであり、絵空事と思ったのだろう、親も了承した。うちの娘はなにを考えているのかとふたりが話しているのを、陰で耳にしたこともある。

小夏の負けん気は、しかし、そこで力を発揮した。

ぐんぐんと模試の結果がよくなっていくのを見た親が後悔し始めてもう遅い。持てる時間と体力をすべてそこにすぎ込んだ小夏は、するりと難関私立校の門をくぐってしまった。それどころか、大賞など届くわけがないと思われていた彼女はオーディションで審査員に太鼓判を押され、業界に送りこまれることになる——まさに執念がもたらしたデビューだった。

もちろん現役高校生でもあるのだから、勉強を欠かすことなどしない。一度知ってしまった成績上位者の優越感、彼女にそれを手放すことを許さなかった。家庭での自習と歌手としての仕事で、千夏の休日はまたたく間に浪費されていく。

(……それを選んだのはわたしだから)

後悔をする気はさらさらない。けれど、放課後をスポーツや芸術、自分の思うように使っている同級生たちを見ると、うらやましさがいじんでくるのは否めない。三年生ともなれば受験も間近だ。高校生としての最後の時間を充実したものにしたいと思うのは、小夏とて同じことだ。

すっかり誰もいなくなってしまった教室で、黒板に向かって小夏はひとりたたずむ。今年の文化祭の出し物を決めていたのがついさっきの話だ。演劇、漫才、いくつか出された案の中に、歌にかかわるものはなにひとつない。

ひととき勉強に秀でた人間が集まった学校の中であっても、小夏はイロモノだ。クラス外の生徒から突然サインを頼まれたときも、特別扱いはできないからと丁寧に断った。けれど、クラスメイトたちがそうした行動をしたことはただの一度もない。

遠慮をされているのはわかっていた。とはいっても、敬遠されているわけではない。性格ゆえにリーダーにまつりあげられることは多かったし、生徒の仲間のうちに入ることもできる。けれど歌手として小夏を“使う”ことを、誰も意見としてあげようとはしなかった。

（優しいのよね）

小夏は結論づける。

ここは高校生としての居場所。歌手としての小夏を心から応援する人間がいても、それを取り上げて利用しようとする人間はいない。真綿に守られたように、くすぐったいけれど大切な、彼女の居場所だ。

小夏は、あ、と声をあげた。時計を見れば、もう約束の時間まで三十分を切っている。伝言を頼んだのはこちら側なのだから、せめて時間に遅れないようにしなければ。

私立高校既定の鞆を肩にかける。制服の指定のないこの高校では、その鞆だけが生徒の証だ。

いたるところから届いてくる女子生徒の笑い声を右から左へ聞き流して、小夏は廊下を歩いていった。

できるだけ早足でスタジオの前まで来たつもりだけれど、和樹はその前で平然と待っていた。ブロック塀に寄りかかったまま携帯音楽プレイヤーで音楽を聞いていたが、小夏を目にとめると電源を切

つてイヤホンを外した。

パーカーを着ているせいか、前回より雰囲気は幼い。あの日の翌日には事務所のなかをあちこち見回してみたけれど、どうしても彼と似た容貌の女性は見当たらなかった。誰もがてきぱきと仕事をこなすような女の人たちばかりだから、どこかどんくさい印象のある彼とはつり合わないのかもしれない。

相手に気付かれないように腕時計を見た。まだ六時までには十分を残している。音楽を聴いていたということは、ずっと前から待っていたのだろう。悪いことをしたかな、と小夏は唇をかんた。

「いつからいたの？」

「そんなに待つてないよ」

ずれた答えを返されたけれど、言わんとしていることは同じだ。カップルが待ち合わせでもしているかのようなかけ合いをしていたことにむずがゆくなつて、小夏はさつさと話をそらすことにする。

「それで……S H E E N Aには会えた？」

「ああ、会えたよ」

和樹はほころぶように笑う。

「“雨宮小夏さんと一緒に歌えて嬉しい” って」

「……は？」

「だから、雨宮小夏さんと」

「あーもういい！ 聞こえてるから！」

二度も同じことを言われてたまるかと、小夏は首を振つてさえぎる。その言葉にもう続きがないことは、目をぱちくりさせた和樹の様子を見ても明らかだ。

敵対心をむき出しにした小夏に対し、泰然とした態度で返してきた。まるで軽くあしらわれたようで、小夏は憤慨する。

「なによ、なあにが“嬉しい” よ！ 見てなさい、S H E E N Aが腰を抜かすぐらいの歌を……」

——ほんとうに歌える？

言葉に詰まった。歌つて、と繰り返しても、その先が続かない。

金づちで殴られたように、勢いがかき消えていく。急激に冷えていく頭の中で、自分に問いかけてしまった。今の自分に——自身の歌すらもまともに歌えない今の自分に、ほんとうにS H E E N Aを超えるほどの歌を歌えるのか、と。

不安になり始めてしまえばもうだめで、疑い始めれば止まらない。「小夏さん」と名を呼んだ和樹に顔を向ける。

痛々しいものでも見るかのような視線とぶつかって、今の自分はそんな表情をしているのかと遅れて理解した。理解はしたけれど、自信にあふれた笑顔などもう取り戻せはしなかった。

「わたしは」

歌えると。歌えると言え。

なかば脅迫概念のように凝り固まった、小夏の中の黒々としたなにかが声をあげる。ここで負けてしまえば、今まで強く保っていた自分が崩れていってしまうから。——だから歌えると、言わなければ。言わなければいけない。和樹の目をしかと見つめる。そのくせ、彼の瞳の中に映る自分は、ひどく頼りなさげだった。

ねえ。

胸の奥に忍びよる、低い声に思考が止まる。それは紛れもなく彼の声のはずなのに、確証が持てない。別人のような声に戸惑う小夏に向けて、和樹はかすかな笑みを浮かべている。

「小夏さん、歌うことは楽しくなくなっただ？」

そんなことはない、と答えることはできなかった。

大好きだと、胸を張ることもできなかった。

それが今の小夏をありありと示している。自身が、迷ってしまった。

「昔のほうが楽しそうだった。気持よさそうだったよ」

「……なんで」

「ずっと雨宮小夏のファンやってればわかる。好きだから」

—— 撃ち抜かれたような心地がした。

自分の歌を、雨宮小夏を、はじめて好きだと言ってくれたのは誰

だったろう？ たった一枚のファンレターが、涙が出るほど嬉しかったのはいつだったろう。それが遠い昔のことのように思えて、二年と少しの歳月はそんなにも長かったのかと錯覚してしまう。

好かれるために歌を歌っていたわけじゃない。ただ誰かに、自分の歌を聴いてほしかった。歌っていられれば幸せで、それに耳を傾けてくれる相手がいればそれで十分だった。

（どうして気づかなかったの）

いまも歌い続けていられるのは、雨宮小夏を愛してくれる人がいるからだ。自分自身が見失いかけた彼女の歌すらも、聴き続けてくれる誰かがたしかに存在するからだ。そして彼ら、彼女らには決して嘘をつけない。違和感をごまかして無理やりに音源に詰め込んだ歌は、こうして簡単に見破られてしまう。

（はずかしい）

自分を嫌いになることは、ファンを裏切ることだ。歌手は、表現者は、誰よりも傲慢でなくてはならないのに。自分の歌に誇りを持って歌い続けるからこそ、プロとしての役目だというのに。

「なによ、」

弱々しい声が出た。そのとたんに、まずい、と和樹が顔色を変える。他人——それも女性に対しては強く出られない少年なのだということは容易に想像できて、そんな彼の言葉で心が震えるほど嬉しくなったことが悔しくて、小夏はもう一度「なによ」とつぶやいた。「あんた、S H E E N Aのマネージャーの弟くんじゃない。わたしなんか商売敵じゃない」

「個人の趣味は関係ないと思います」

そう言っ て ななめ下を向く。

「そんなもんなの？」

「そんなもんです」

「……ありがとう」

「どういたしまして、……え」

どうして礼を言われたのか、とばかりに和樹はぽかんと口を開け

た。

その間のぬけた顔を見ていると、ほんとうは悩みごとなど何こともなかったかのように思えてきた。ただ、今まで見えていたものが見えなくなってしまうていただけ。それだけだった。迷走していたことすら、馬鹿馬鹿しく思える。

穏やかに息を吸いこんだ。

「S H E E N Aにもうひとつ、伝えてもらってもいい？」

「ケンカはちよつと……」

「もう違うわよ」

唇をとがらせるが、先にケンカをふっかけたのはこちらの方だ。

小夏はわざとらしくせき払いをして、それから声をやわらげないようにと気を遣う。

「“こちらこそ”って。あと、“手を抜いたら承知しないから”って伝えておいて」

「どうしてそんなにきついかなあ」

「ずいぶん丸いでしょうが！」

言葉がつっけんどんなことは否定しない。やはりうつうつと恨んでいた相手なのだから、そう簡単に好きになることは難しそうだ。その恨みの大半が八つ当たりであることには、今やっと気付いたばかりだけれど。

ふわり。

小夏の髪をゆらして吹き抜けた風には、とうに熱気が混じっていた。梅雨の時期から夏へと、それは早くも移り変わるうとしている。湿気はいよいよ消えていき、太陽はやがて高くにのぼるようになるだろう。ぽつかりと浮かんだ入道雲から、陽炎を洗い流すような大粒の雨が落ちる季節が、もう少しでやってくる。

雨宮小夏の名が生まれた、その季節が。

もうひとりの自分

息が上がった。

アップダウンの激しい曲調は、はりのある高音を持つ彼女の得意とするところだ。とはいえ、歌い終えた瞬間の体中の力が奪われるかのような虚脱感は、他の曲を圧倒してあまりある。

メロディに歌声を乗せれば、それは高圧的な音となってふりそぐ。スタジオの中に満ち満ちた音楽は余さずひとところに収束し、そうして世界でただひとつの歌へと変わる。そんなふうに作り上げられていく曲が、歌が、大好きだ。けれど。

（疾走感あふれるギターチューン？ 大嘘にもほどがあるわよ）

こちらを試してきているとしか思えない。小夏の本領を発揮できるような曲調の難易度を執拗なまでにあげて、これぐらいなら歌えるでしょう、とでも問いかけてくるような。自尊心が邪魔してSH EENAの歌を聞いたことはないけれど、こんな歌ばかりを歌いこなしているのなら歌唱力うんぬんの前にまず嫌味だ。

負けるものと力をふりしぼった。結局のところ彼女を突き動かしているのは歌うことへの愛と、誰よりも強い負けん気だ。酸欠になるのではないかと心配になったのはデータを見たときだけで、歌うそのさなかはずべての懸念を捨て去った。

その結果がこれだ。深呼吸をくりかえして、なんとか普段の呼吸をとりもどす。

『はい、おしまい。お疲れさま！』

ヘッドフォン越しに、野宮の声が聞こえてくる。その声色はいつになく温かく、小夏はきよんとして窓の外に目を向けた。最初に目があった女性のエンジニアはふんわりとほほ笑み、うんうんとなずいている。困ってしまったて、野宮と同じようにマイクに向かって声をかけた。

「あの、今ので……」

『オツケーよ、よかったわ』

何か月ぶりに聞いた台詞だろう。目がくらむような高揚感を身の内にこらえると、じわじわと口のはしがつりあがって三日月を形どる。ありがとうございますと頭を下げ、小夏は小走りでスタジオの扉を開いた。

「一週間でなにがあつたの？　びっくりしたわ」

「わたしも、よくわからなくて」

半分は嘘、けれど半分は本当だ。

和樹と言葉を交わしたことが関わっているのだとは思うが、歌いかたを指摘されたわけでもアドバイスを受けたわけでもない。むしろそんなことをされようものなら、反発して逆の方向をいくのが小夏だ。

雨宮小夏のファンだと言ったあの少年と会ったのが二日前の金曜日。前回のレコーディングが一週間前。ターニングポイントは確かにそこだった、しかし彼の言葉に、小夏の歌声までも変える力があるものだろうか。

「デビューしたての頃みたいだけど、もっとうまくなった。……うん、すごくいいと思うわ」

「あ、ありがとうございます！」

腰を折って、大きく頭を下げた。胸がどきどきしている。野宮にここまでほめられたのも久しぶりで、飛びあがって喜びたい気持ちを必死で抑えていた。よかったですよ、と同様に言ったエンジンニアは眼前の機械をいくつか操作して、マイクの電源を落とした。

「まだ録りますか？　わたしはこれで十分だと思いますよ」

「そうですね……どうしましょう、小夏ちゃんは？」

「——え、っと」

実のところ、歌うのに集中しすぎて、技術のことなどまったく気にしていなかった。ここでビブラートをかけよう、ここで張りあげようと、音楽活動が続けるにしたがって気をつかうようになったこともすべて忘れていた。けれど、もう一度録り直して、果たしてあ

の歌が歌えるだろうか。

気をきかせたエンジニアが、先の音源を流し始める。それをサビの途中まで聴いたところで、小夏は首をふった。

「わたし、これでいきたいです」

「そうね」

野宮もうなづく。

確かにささいな粗はある。しかし、小手先の技術に目を奪われれば失われてしまうようななにかが、その歌にはあるように思えた。誤った選択ではないはずだともう一度、自分を納得させるためにもうなずき返す。

あとはこの音源をS H E E N Aのほうへ渡して、既定の場所にメインとなる歌とコーラスを入れてもらうのを待つだけだ。先にコーラスを録り終えているから、小夏の分担する歌唱部分はここで終わりになる。

理解がいったとたんに力が抜けて、張りつめていた緊張がとけていった。

「野宮さん、あの、迷惑をおかけしました」

野宮が、眼鏡の奥の目をこころなしに見開く。

「わたし、ずつとうまく歌えなくて。歌手として駄目でした。メンタル弱かったって」

「あら、いいのよ」

けろりと返される。野宮は目をほそめた。そうして笑うと、もともとりあがった目のせいか猫のような顔になる。

「誰にだって調子が出ないときがあるもの。そういうときは待つのが私たちマネージャーの役目。歌うことをやめないでさえくれたら、それだけでいいの」軽い調子でひらひらと手をふってから、エンジニアに向かって「それじゃあ今日はこれで。ありがとうございました」と一礼する。

おつかれさまでした。エンジニアがゆるやかな動作で頭をさげた。ベーシユを基調としたふんわりしたフレアスカートには、そこかし

こにレースがあしらわれている。森ガールだわ、とは、一目見たときの小夏の影響だ。

野宮に顔をもどすと、机の上に広げていた資料を片付けているところだった。その中にはもちろん小夏のスケジュール表も含まれている。来週にも余裕を持って取られていたレコーディングの予定を、野宮が二重線で消していく。

（……でも歌えないあいだは、あなたがいちばん怖かったです）

そんなことなど冗談でも言えず、帰り支度をはじめた面々の中で、小夏は自分の鞆を肩にかけた。

「へえ、それで？」

興味しんしんといった様子で尋ねた件の少年に、小夏は肩をすくめてみせた。

背の低い樹の植えられた垣根ごしに、車が低いうなり声をあげて走っていくのが見える。入り口とは正反対にあるために、スタジオの裏側には日の光は届きにくい。

公園にあるような鉄製のベンチがひとつ、用途を忘れてしまったように置いてあったのは幸運だった。そこに二人は並んで座っている。

小夏は今日の日付を確認するように空を見て、指を折った。

「S H E E N Aの音源があがって、CDになったのが一週間前ですよ」

「うん、買った」

「そ、そう。それで——わたしは発売のちょっと前に聴かせてもらったの」

かなわないはずだ、と思い知った。

S H E E N Aが主旋律を取るパートはもちろんだが、引き込まれたのはむしろ、それが副旋律に回ったとき。小夏が前に出ていく部分だ。

荒削りだったのは自分でも分かっている。自由に歌えば、どうし

ようもないあどけなさが出る。その歌声に厚みを増しているのがS H E E N Aの担当するコーラスで、言うまでもなく既定の区分の完成度は高い。だがS H E E N Aは、割り振られたパートを歌うだけにはとどまらなかった。耳をすまさなければわからないほどかすかに高音に混じったその声が、小夏の歌声のよさを消すことなく昇華させる。

あれだけのことをされれば十分だ。あちらは小夏の歌をこれでもかというほどに聴いている。どこが足りないか、どこが魅力になっているのか、すべて理解したうえで重ねてきた。

いわば尊重と補完の歌。S H E E N Aを慮ることもなくパスをした小夏とは、目指すものからなから違う。

「負けたって思ったわ、悔しいけど」

その悔しさは、けれど、恨みには変わらない。

小夏への悔りなど、はじめからなかった。そんなことは、ひとつフレーズを耳にすれば伝わってくる。あれはひとりの歌手として、ひとりの歌手に向き合った結果だ。

「文句はないの。出ないのよ」

「そっか」

和樹がほつとした様子で目をそらした。

これといって待ち合わせをしていたわけではなかった。打ち合わせを終えて事務所を出たところで、また彼とはちあわせしたのだ。初めは驚いたものの、よくよく考えてみれば彼の姉はその事務所に勤めているのだからおかしいことではない。

どうだった、と問われたのがついさっき。事務所の裏に回って人目を避けるようにしているのが今、だ。

黒いズボンにワイシャツ、その下にTシャツといういでたちは、学校の帰りだからか。校章もなにも入っていないからどの学校かまでの判別はできないけれど、高校生であることはわかる。中学生ではないだろう。年のころは同じだ。

デビュー当時は、自分よりも年上のファンが大多数だった。それ

が今ではどうだ。数の上ではもちろん年上が半数を超えるだろうが、同年代、さらには年下の学生たちまでもが小夏を応援している。

(……ひとりのファンコールでやる気が出るなんて、簡単なものね) 認められたかったのだろうか。

ふと思っただのは、大人の中でぽつりと歌う孤独からかもしれない。

「そう、あんたにもお礼を言わなきゃ」

「え？　なんで」

「ありがとう」

「どういたしまして？　……あの、なにが」

わけも分からずといった具合で返す和樹は、もう小夏に対してどうもことがない。小夏もまた、クラスの男子と言葉を交わすときのように、思わず一歩引いてしまう感覚は彼に対しては抱かなかった。どうやら仕事に関わってくるとその感覚も麻痺するらしい。雨宮小夏として接するからだろうか。

そう考え至った瞬間、笑いだしてしまいそうになる。こうして当然のように会話を交わしておきながら、自分の本名は明かしていないのだ。

「瀬尾小夏、っていうの」

「せお……？」

「わたしの名前。雨宮は芸名だから」

瀬尾小夏の友人は、雨宮小夏を見ようとはしない。雨宮小夏を売り出す事務所の人々は、瀬尾小夏の生き方には目もくれない。別のもんとして切り離された二人の自分の両方を、どちらも小夏だからと受け入れられたためしはなかった。それでもいい、と思っている。これを繋ぎとめるのは自分で、自分だけがそれをわかっていればいいのだから。

けれど、名前を伝えるくらいはいいだろう。隠しているわけではない。調べれば、ネットの片端くらいには存在しているだろう名だ。

「瀬尾小夏、さん」

「あんたの名前は？　弟くん」

そう問うた瞬間、顔をしかめられる。やっぱり覚えてない、とぼそりと言われて慌てた。

「あ、だから、フルネームよ！ 名字まで！」

実を言えば名前もあやふやだ。もちろんそれは隠しておく。

小夏の弁明が功を奏したのかは分からないが、ふいに彼はよそを向いた。拗ねているというわけではないらしい。考えこんでいるようなその様子に違和感を覚えた。

「隠さなきゃいけないってこともないでしょ？」

「や、うん…… まあいいか…… 小夏さんだし」

「なによその言いかた」

「馬鹿にしているわけじゃなくて。…… うん、いいか」

どうやら彼の中にはなんらかの葛藤があったらしい。いいか、とつぶやいた和樹の顔はなんとなく晴れやかで、暑い日にゆるりと通り抜けた風のような、全力疾走をやり終えた瞬間のような、そんな表情をしていた。

「椎名。椎名和樹です」

—— しいな。

それを聞いて呼吸が止まった。

「え、え？」

まさか、と心がストップをかける前に、小夏の頭は働いていた。思い当たる節はいくらでもある。

もしもS H E E N Aが小夏のように、本名から芸名を作り出したのだとしたら。芸能界を見ても、そうして芸名を選んだ著名人は数えきれない。

それに、小夏の本心に向かって問いかけてきたとき、まるで別人のように変わった和樹の声色はなんだ。雰囲気や口調というだけの話ではなく、突然他人がそこに現れたのかのように思うほどの変わりようは。

—— そして、もうひとつ。

（マネージャーの弟だからって、S H E E N Aに直接会うなんてこ

とが、ほんとうにできる？)

考えてみればそうだ。同じ事務所内、さらにはコラボする相手にも徹底的に隠されたS H E E N Aの正体が、マネージャーの弟とはいえ部外者の彼に知らされるはずがない。あまつさえ直接会って言葉を交わすなどということができようか。

(待つて、待ちなさい)

ようやく思考を制御する。考えすぎだ。彼はあくまで、S H E E N Aのマネージャーの弟で。杞憂ならばそれでいい。

あくまでも今のは小夏の想像にすぎないのだと。名字が椎名というだけですぐに関連付けてしまうのは、早計にもほどがあると。

まさかね、と愛想笑いを浮かべて和樹を見つめた小夏に、和樹はにっこり笑って、

「S H E E N Aは、おれです」

——容赦なく爆弾を落としていったのだった。

それは誘拐のように

腹の出たあのエンジニアと仕事をしたのは、録音が終わった段階で三回だった。録り終えたときには陰ながらガッツポーズをしたものだ。間延びした声と外見との対比がどうしても苦手で、実績があるとは知っていても、共にいる時間が苦痛だった。

レコーディングを終え、事務所で簡単な打ち合わせをしたあとに、野宮と並んで歩く。夕飯は彼女と食べる予定でいた。歩調も軽快になるというもので、野宮はそれをさして笑う。

「ずいぶん元気ね、そんなにあの人が嫌だった？」

「はい！」

「いいお返事。でも駄目よ、そういうこと言っちゃ」

性格が合わない相手なんて、ごまんといるんだから。そう肩をすくめられた。仕事には私情を持ちこまないところにはひそかに憧れている。マネージャー業は自分が初めてだと言っていたけれど、この事務所に勤めていた期間はもつと長いはずだ。

多数の歌手と専属のマネージャーを抱えこむこの事務所で、今や売り上げトップの座についているのはS H E E N Aだ。そのマネージャーは彼の姉だという。

あれから質問攻めにしたけれど、和樹はなにひとつ嘘についてはいなかった。彼の姉のマネジメントの対象がS H E E N A、彼自身であつたというだけだ。

——椎名美里。その女性が、彼の姉だという。聞いたことのない名ではあつたけれど、そもそも事務所に勤める人の名前をすべて把握しているわけがない。

似てないって言われるけど。そう最後につけ足して、和樹は照れたように笑った。

（そうだ）

小夏は足を止めた。ふり返った野宮を、仰ぐ。

「野宮さん。この事務所に、椎名美里さんって」

「うん？——ああ、椎名先輩ね。いるわよ」

先輩。野宮よりも前から事務所に勤めている女性だ、と記憶にためて、小夏はさらに尋ねる。

「どんな人ですか？」

「どんな人って、そうねえ」

それきり考えこんでしまう。野宮さん、と不安になって名前を呼ぶと、彼女は眉を寄せた。

「ひとことと言っなら」

「あつ、小夏ちゃんだ！」

野宮のものではない声に呼ばれた。ハスキーながらも、女性の伸びを残した声は耳ざわりがいい。しかしそんな声には聞き覚えがなく、怪訝に思った——のも、つかの間。

このあたりにいるだろうと見当をつけた位置に目を向けても、すでにそこには誰もいない。どこにと慌てれば、すぐ横でなにかが動く気配がした。

ほんの数秒で廊下を抜けたのか。驚いても遅い。

「変な人、かしら」

野宮が答えを出した瞬間に、素早くがつつりと腕をつかまれる。

女性のものだとすぐにわかる細くて白い指には、驚くほどの力がこめられていた。ふり払おうという考えが頭に浮かぶよりも前に、その女性はさらに腕を引いていく。抗えず、台風のようなそれにさらわれる。

「野宮、この子借りてくね！」

「はい？……って、椎名先輩、待つ」

それ以上は聞きとれなかった。

歩幅が長い女性の早足についていくには、小夏は自然と走らざるを得なくなる。腕をつかんだ手の力はゆるむことなく、引かれるままに事務所の廊下を抜けていく。足音が聞こえないのは、彼女が履いているのがヒールのない靴のためだ。

（ちょ、っと。待つて）

編みこまれた茶髪と、すっきりした立ち姿。暗い色のジーンパンにシャツというシンプルな服装は、背が高くすらりとした体型の彼女によく似合う。野宮があくまでも女性らしさを中心にすえた美人なら、こちらは男性の中に混じっても違和感のないような美人だ。軽やかに、大股で歩いていく姿も様になっている。……いるけれど、これではまるで。

（誘拐っていうんじゃないの……っ！？）

流されて、流されて。

気がつけば小夏は、事務所の外の軽自動車に乘せられていた。

そのまま連れてこられたのは、郊外にあるマンションの一室だ。

走った距離はそう長くはない。むしろ事務所とくらべれば、小夏の家に近づいていた。普段は学校や事務所への移動に電車を利用している小夏だが、このマンションからであれば自宅にも徒歩で帰れるだろう。後部座席から見知った風景が目飛びこんできたときには驚いたが、帰りは楽ができそうだと予想外の幸運に喜ぶことはできなかった。

「……………」

——無言のまま受ける、刺さるような視線が痛い。

部屋の中央にある低いテーブルの前に、小夏は腰をおろしていた。相対的に上から向けられるそれから、必死に目をそらす。そこにどんな表情があるかなど容易に想像できた。えてしてその通りだったのだろう、彼の口から最初に出たのはため息だった。

「あのさあ」

「ふ……不可抗力よ」

とうとう耐えきれずに顔をあげてしまう。呆れの一色に染まった目とかちあった。

どうやら学校帰りらしい。前回に出会ったときのようなワイシャツを着ている。着崩すということをしないようで、そのボタンは二

つほどを残してきつちりと留められていた。

荷物が詰まっているためか垂れ下がったショルダーバッグを部屋のすみに置いて、和樹はキッチンへ歩いていく。そのキッチンからは、先ほどから絶えず鍋の湯が沸く音が聞こえてきていた。小夏をここに連れてきた張本人である和樹の姉、美里が夕食の準備をしているらしい。

親御さんに連絡しておいてね、と言われるままに携帯からメールを送ったが、いまだに自分がなぜ連れてこられたのかはわからない。まだまだ。

戻ってきた和樹が、同じ机を囲んで座る。

「どうせ姉ちゃんに連れてこられたんだろうけど。人の話聞かないから」

「どうしてわたし、つれてこられたの」

小声で尋ねると、さあ、と肩をすくめられる。姉弟でも意図がつかめないというのはどういうことか。

和樹の目が、正座をしたままの小夏の足に向けられた。彼は申しわけなさそうに眉を寄せ、自分の足を軽く叩いてみせた。

「あんまり気は遣わなくていいよ。晩飯だけ出したら帰すつもりだろうし」

「気を遣うなってほうが無理でしょ、人の家に来てるんだから」

「しっかりしてるね」

「親の教育よ」

小夏の両親は厳しい人で、一人娘に対してももちろん例外はなかった。それに反感を覚えることこそすれ、理路整然とした両親のいibunはもつともなことで、しぶしぶ従っているうちにそれらは身に染み着いてしまっていた。芸能界で生きていくことが決まった当初には、ずいぶんと役に立ったものだ。

台所の音がいったん止まり、代わって油のはじける音が聞こえてくる。次々と移り変わるその音が手慣れている気配を感じさせて、成人している美里なのだからそれは当然なのかもしれないとは思っ

たけれど、疑問が浮かんた。

（ご両親が見えないのよね）

このマンションの一室に入るや否や、美里はさつさと夕食の調理に入ってしまった。手持ちぶさたになった小夏は、家への連絡をすませたあとは部屋の中を見わたしているしかなかったのだ。きちんと整理された部屋のなかには、なぜか彼らの両親の私物らしきものが見当たらない。

美里が戸惑いもなく料理に移ったこともあわせて、もしやと思った。

「ご両親とは離れて暮らしてるの？」そこであつと思つて、「言いたくないならいいんだけど」とつけ足す。

若くして両親と離れて暮らしているのだから、なにか並々ならぬ理由があるのかもしれない。他人の問題に首をつっこむのも失礼かと、言つてしまつてから後悔した。

和樹は虚を突かれたように、ええと、と言いよんだ。二重の目で数回まばたきをする。どう説明すべきかと考えていたらしい、それから言葉を選ぶようにゆっくりと言つた。

「うちの両親、仕事先が海外だから。日本に居ることのほうが少なくて、しかも実家かなり地方で。ここから……ええと、車で一日かかるぐらいの」

納得がいつて、ああ、と相槌をうつ。

小夏たちの属する事務所の本社は、都心をはずれた辺りにある。

それでも大都会東京には変わりない、地方出身の歌手ならばまず転居を考えるだろう。ただでさえ多忙なのに、移動時間がそれ以上にかかるのではとてもではないが生活していけない。

「それで越してきたつてわけ」

「そう。……ごめん、ちよつと荷物だけ片付けてくる」

うなずいた和樹は立ち上がり、置いたままにしていた自分の荷物を肩にかけた。知らない相手ととり残される小夏の事を気にかけていたのだろつ、香ばしい匂いがただよい始めた台所を見やり、声を

ひそめて言っ。

「変なこと言われてもさ、無視していいから」

「変なこと？」

「聞こえてんのよ、和樹ー！」

突如響いてきた声に、和樹が肩をすくめた。ということはつまり、今までの会話もすべて聞こえていたのだ。

水気をふくんだ布巾を持って部屋に戻ってきた美里が、一度和樹に視線をやってから小夏に笑いかける。机の上を拭く手つきも慣れたものだ。

「小夏ちゃん、もうちょっとだけ待っててね」

「すみません、ご飯なんていただいて」

「いいのいいの。連れてきたのはこっちだし。暇にさせちゃってごめんね、……そうだ」

手を止めて、ある一方を指差した。和樹が入ってきて開かれたままの、横開きの扉の向こうがわだ。いくつか部屋が並んでいるが、指はそのうちの真ん中を示している。

「あれ、その子の部屋だから」

「はい？」

意味が分からず小夏が尋ねかえすのと、和樹が顔色を変えるのが同時だった。美里は少年のような笑みを浮かべてみせる。化粧のきつさのない彼女に、やはりそれはよく似合っている。

「入ってもいいよ、おもしろいものもあるし」

「姉ちゃん！」

「いいじゃない、恥ずかしいものでもなし」

布巾を手に立ち上がって、お好きにどうぞ、とばかりにまたキッチンへ戻っていく。冷蔵庫を開けたのであろう音があとに続いた。まだ調理は続くらしい。

和樹を見上げると、今度は彼のほうが懸命に目をそらしていた。さつきとは真逆になった立場がおかしくて、小夏はなんにも言わずにそのまま彼を見つめ続ける。おもしろいもの、と言った美里の言葉

が気にかかってもいた。

「……そんな、なにも」

しぼりだすような声が出された。それでも目を合わせようとしない和樹の隣で、小夏は立ち上がる。そうしてしまえば、背丈はほとんど同じだ。それでいくらか威勢を取り戻して、小夏はにっと口のはしをつり上げた。

「おもしろいかどうかはわたしが決めるわ」

「……横暴」

ぼそりとつぶやかれ、彼の背を強く叩いた。うめき声のあと、「それに暴力」と続く。

「わかったよ、わかったから」

ななめ下を向いての言葉と、短いため息が漏れた。

和樹が他人に対して強く出られない姿勢は、どうやらあの姉と暮らしているうちに染みついたものらしい。ひとり暮らしの小夏にはわからないが、やはり歳の離れた兄弟には逆らえないものなのだろうか。

肩を落として先を歩く彼の背を見て、小夏はくすりと笑った。

多くの道があるゆえに

小夏が歌手を目指したのはほかでもない、あこがれた歌手がいたからだ。

どんよりとした雨空を貫くような歌声と、少しばかり体調をくずしても笑顔を絶やさない芯の強さ。外見でも歌詞でもなく、その人自身に心を奪われた。同じように歌いたいと思った。

けれど“その人のようにになりたい”は、やがて、“他人に歌を聴いてもらいたい”に変わっていった。歌う喜びにすっかり魅了されて、あこがれの人を模倣することに意味を見出さなくなった。彼女のCDはまだ保管しているけれど、小夏が歌手になってからは聴いていない。

とどのつまりは、いくら誰かのファンだったとはいえ、自身が歌手になれば自分を磨くことに重点を置くようになるのがふつつなのだ。そこそこ人気がつくようになればなおさらのこと。

小夏自身の体験で実感したそれが、しかし、たったいま覆されようとしていた。

「椎名」

呼びなれてしまえばそれはただの名字であり、彼を呼称するにはちようどいい。小夏は目の前のものを信じられない気持ちでながめていたけれど、ようやく口を開いた。

「……ぜんぶ？」

「ぜんぶ、です」

一応。

それぞれを調べる必要もない。部屋の一角をしめている棚には、びっしりとCDがつめられている。そのどれもが自分の歌ったものであることは、カバージャケットを流し見ていけばわかる。ところどころで同じタイトルがふたつ連なるのは、初回限定版と通常版をそれぞれそろえているからか。

CDの列がとだえれば、そのとなりには音楽雑誌がつづく。いくつかを手にとって調べると、表紙や大記事、コラムを問わず、小夏が取材を受けたものや写真を撮った記事が収められている。デビューしたてのころの受け答えは見るにたえず、ひらいた瞬間に雑誌から顔をそむけた。

CDのうちのひとつ、初期の一枚を取り出した。ジャケットのなかで、花束を抱えた二年前の自分が虚空にほえんでいる。

「これなんて、すぐに廃盤になったやつじゃない」

「いつも発売日に買ってるから」

「ぜんぶ？」

「……ぜんぶです」

小夏は棚のCDを取り出しては戻してをくり返す。いくつか質問を発して、そのたびに和樹が身を縮めているのはわかっていても、驚きと感嘆が先に立った。嬉しいも気持ち悪いもない。まず自分のCDがここまでそろっているところを初めて見た。

そのくせ彼がS H E E N Aとして歌ったCDは、空いている棚の端に乱雑に詰めこまれているのだ。小夏が過去、消費するように聴いていったCDでも、あそこまでの扱いは受けていなかった。

「……その、なにも言えないの。ありがとって、言うべきなんだけど」

「もうなにも言わないでください」

だから嫌だったのに、とひとりごとを言っている。なんだか申しわけなくなつて、小夏は棚に背を向けた。部屋の扉側で両手を組み合わせている和樹の様子は、まるで、親に怒られたあとの小学生だった。下を向いてむくれた顔をしている。

「嬉しいのは確かなの。ただ、ファンってこういうのが普通なのかって、びっくりして」

再度棚に目を戻そうとすると、和樹が顔を上げた。口調はそのまま、ぼそりと答える。

「ほかの人のことは知らないけど。おれは、買ってます。毎回」

それも発売日に、もしかしたら予約までして。雑誌は特定のを、毎月チェックして買っているのか。歌手として稼げるようになるまでは、自由に使える金額だって少なかっただろうに。

口元をおさえた。あちら、こちら、と視線がさまよう。

「いまの、うれしかったかも」

「……そうですか」

ふう、とひとつ息をついて、和樹はふっきれたらしい。諦めの表情がのぞいている。むくれた顔がものめずらしかったのだけれど、それは心の中にとどめておくことにした。

廊下をわたって、和樹のうしろに美里が立った。女性にしては背の高い彼女と和樹とでは、年齢を差し引いても身長差が大きい。それも二人の関係の原因だろうか、やきたいもないことを考えた。高校生にもなれば男性はぐんと背が伸びるはずが、どうやら和樹はその恩恵を受けなかったらしい。

「すごいでしょう、それ」

驚きましたと答えると、美里は満足げに和樹の頭を叩いた。それを受ける彼は反対に不服そうに顔をそむけている。上下関係はともかくとして、二人の間にこれといった確執のないことは確かだ。

（いいな、兄弟）

和樹にそう言えば、抗議の声が上がるのは目に見えているけれど。

テーブルの中心には透明なボウル、そしてルツコロとモッツアレラチーズのカプレーゼ。ひき肉のたっぷり入ったボロネーゼと、海老や貝類の乗せられたピザが湯気を立てている。香ばしい匂いの正体はこれか、と、小夏は口をぽかんと開けていた。美里は盛り付けにもこだわる性分のように、ピザの具材は均等に並べられ、ボロネーゼには見ばえよくパセリが飾られている。

「美里さん、調理免許とか、そういう」

「持ってないわよー、音楽ひとすじなもの。ほら、食べて食べて」
いただきますと手を合わせて、パスタを口に運んだ。すぐにトマ

トの風味が飛んできて、あとからパルメザンチーズのまろやかさがその酸味を包んでいく。ほう、と声がもれそうになるのをかろうじておさえた。反応を待っているらしい美里を見あげて、ごくりのみ込む。

「おいし……おいしいです、これ！」

「そっか、嬉しいなあ。がんばってみてよかった」

小夏の向かいに美里、二人の隣になる形で和樹が座っている。彼もまた口の中のものを嚥下したあと、氷と麦茶の入ったグラスに手をのばした。

「本当、どうして結婚できないんだろうね。外っ面は完璧なのに」
要は中身、と言外に匂わせたのは、先ほどの意趣返しか。美里はにこやかな笑顔をまったく崩さず、カプレーゼを三人の皿に取り分けた。パプリカが和樹の皿に多めに入ったのは、きっと偶然ではない。

「家にひとり、厄介なのがいるからかしらね」

「なるほど、自分のことか。そうだね」

「気付いていないうちが華って、よく言っただわー」

嫌味の応酬を、ピザをほおびりながら聞いていたが、途中で追うのをあきらめた。少しして和樹が眉を寄せたのを見て、言い負かされたのかとぼんやり思う。年の離れた姉には口でも勝てないようだ。もっともこの場合、相手が悪かったのではと思わなくもない。

とうとう食器のこすれる音だけが響くようになり、ある程度を腹に入れたところで、小夏は再び美里を仰いだ。それまでもずつと見られていたのか、ばちりと目があう。それにややおののきながら、小夏は手のフォークを置いた。

「わたし、どうして連れてこられたんですか？」

本題に入らなければ、このまま夕食だけ出されて返されそうな気がしていた。そうそう、と美里は手を叩いて居ずまいを正す。それだけでぴんと伸びた背筋は、どこか小夏の母親に通じるものがあった。

「ええとね、和樹のことなんだけど。SHENNAの話はしたんだよね」

「はい。あ、もちろん誰にも言いません」

事務所と本人の決めた売り出しの方向性に、もはや嫌悪感など抱いていない。それを補ってあまりある実力と、歌に対する真摯な姿勢があることもよく理解している。

「そう、誰にも言わないで欲しいだけ。それが頼みたかっただけなの、今回は」

一口食べたきりのピザを取り皿において、美里は油のついた手を布巾でぬぐう。拍子抜けした小夏に、目を細めて言った。

「その子ね、デビューしたのが一年前なんだけど、そのときもいろんな声を持ってたの。この曲はこの声で、こんな風に歌えばいいって、わかっているみたいだね。それが全部和樹の可能性で、わたしも社長も知っているんだけど、……でも歌手って、そうじゃないでしょう?」

歌手は表現者だ。

作詞家、作曲家によって作り上げられた枠に自分を注ぎ、時にはあふれださせて、楽曲を構成していくのが歌手の仕事。ひとりひとりには個性という名前のキャパシティがあつて、それが限界になったり自身の味になったりと姿を変える。

その個性がなければ、もちろん道は大幅に広がるだろう。あらゆるものに対処し、成功し、容量どおりに枠を満たすことができる。

——けれどそれは、自分がないのと同じことだ。歌という自分を表現する方法に、もともと自分がないのでは意味がない。

曲の枠のとおりに歌うのではない。曲を制御し、時には傲慢なまでの自己意識と個性で枠を壊していくのが歌手という職業だ。

「その気になればどの方向も選べるの。だけど、それが見つからないのね。だから社長は、SHENNAを覆面歌手として売りだした。顔も性別も歳も隠して、いつでも好きな道を選べるように」

——それはすなわち、自分を見つけられるように。

小夏が選びとってきたのは、好きで好きでたまらなかった歌を歌うための道だ。最初こそあこがれの人を追いかけたものの、自分が歌うことに喜びを見出した瞬間から、それは小夏の道になった。自分にしか歌えない歌を作り続けてきた。ほかの歌手もまた、同じように自分を選びとっていったのだろう。

それができない歌手。進める道が多すぎて、立ち止まってしまったのがS H E E N Aという歌手だ。

美里は残った麦茶を口に流しこみ、ひとつ息をつく。

「だからね、黙っていてあげてほしいの。この子が和樹として歌えるようになるまで、待ってあげて」

「……はい」

居心地の悪さを隠すように、皿に残っていたパスタを口に入れる。味を感じることができなくて、ほとんど嚙まずに飲みこんだ。

美里は小夏と美里の顔をうかがって苦笑した。同じ顔をしてうつむいていたらしい。ちらと壁時計を見やり、明るい声で彼女が言う。

「ごめんね、遅い時間になっちゃった。和樹、小夏ちゃん送ってあげて」

「ん」

和樹がテーブルに手について立ちあがったので、小夏はあわてて首を振った。

「大丈夫です、ひとりで帰れます。家、近いから」

「それでもね、最近は危ないから。……ご飯、もったいい？」

食器が端から片付けられていくのを前にして、手を合わせて「ごちそうさまでした」と小声で言った。

最後までおいしく食べることができなくてすみません。心の奥でそうつぶやいて。

夏が盛り近づく夜は、時間帯などなんのそので生ぬるい熱気をただよわせる。マンションを出た瞬間に広がったそれに顔をしかめ

ていると、横からの温かい風が追い打ちをかけた。

「家、どっち？」

「北区のほう。郵便局の近く」

「それじゃ本当に近くだ」

以前は暗かった住宅地も、痴漢さわぎが多くなってからはところどころに街灯が作られるようになった。夏の夜にもなれば小さな虫が光に集まり、8の字を描いては気が狂ったように街頭にぶつかっていくのを目にすることが多い。

歩きだせば、その町並みには見覚えがあった。小学生のころはこの西区を通って通学していたため、このあたりの道を歩くのは懐かしい。高校生になって違う学校に入った彼らは、彼女らは、今はどうしているのだろうか。数人はすでに名前も顔もおぼろげにしか覚えていないが、そんな彼らにとっても、自分は同じように輪郭のうすい存在だったはずだ。

やがて足元を見て歩くようになった小夏を、和樹は一度ふり返った。彼女が反応する間もなく、すぐにまた前を向いてしまう。

「……あのさ、気にしなくていいから」

ひとりごちのようなそれを聞き逃しはしなかった。小夏が顔を上げると、彼の言葉が続く。

「重い話じゃなくて、ただ、黙っていてくれればってだけ。……これはおれが、どうにかすることだし」

もちろん、小夏が口を出してどうこうできる問題ではない。——それが歯がゆい。力になりたいという思いはあるのに、持っているものも選んできた道も決定的に違っていた。個人としてあたりまえの違いが、こんなにももどかしいと思うときが来るなんて。

数歩進んで立ち止まる。鞆から携帯電話を取り出して、数回ボタンを操作した。真っ白なそれは、高校入学と同時に両親に買ってもらったものだ。仕事とプライベートの区切りがしっかり付けられたアドレス帳に、もうひとつ未設定のフォルダを作る。

今度こそふり返った和樹に、その携帯を突きつけた。

言わんとしていることは伝わったのだろう。目をしばたかせた彼の「でも」という戸惑いの声をさえぎる。

「それでも先輩だから。……相談なら、乗るわ」

「小夏さん」

「前にも世話になったし、今日もご飯おいしかったし！ だから、

——番号と、アドレス」

メアド、と呼ばなくなったのは、年上にまじって仕事をするようになってからだ。若いねと大人にほほえまれるのが、なんだか気恥ずかしかった。そう思ってアドレスと呼ぶようにすれば、女子高生たちには笑われるのだ。

「ご飯は姉ちゃんの手柄だよ」

和樹は眉尻を下げて、ポケットから引きぬいた青い携帯をひらいた。受信画面を見せたままの小夏に、赤外線でプロフィールが送られてくる。名前と電話番号とメールアドレスだけが書かれた簡素なそのプロフィールを新しいフォルダに登録して、代わりに自分のものを送った。

小夏の携帯に送信終了の文字が表示されると同時に、彼はほおを緩める。

「初めてかも」

「は？」

「女の人」

「……そう」

二つ折りの携帯電話を勢いよく閉じると、もう一度鞆に放りこむ。早足で和樹を追いこして、背を向けたままと言った。

「ここまででいいわ。もうすぐだから。ありがとう」

「だいじょうぶ？」

うしろ向きに投げやりに手をふって、走りだす。あとを追う足音はなかった。

（なんて、ことを）

言っただろう。

いつまでも話していることができそうになくて、逃げ出すように彼から離れていた。言い訳じみた言葉のとおり、家が近かったことだけが、唯一の救いだ。

植木に囲まれた自宅の、その白い壁に手について、荒い呼吸を整える。鍵をあけて家に入ることとせずにその場にしゃがみこんで、膝を抱えた。顔が熱を持っているのは、全力で走ったからか、夏の暑さのせいかな、それとも。

（顔、合わせづら……）

できれば事務所に行く日が重なりませんように。
そう願って、はあと息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6825y/>

レイニーソング

2011年11月27日23時52分発行